

『考古学から探る古代の住まい』

質問回答集

第 1 講 旧石器時代の住まい

安蒜政雄先生(明治大学文学部教授)

<質問>本日、お話のあった遺跡は関東地方のものばかりでしたが、それ以外の地方での固定式住まいの例をお教え下さい。

<回答>日本列島の石器時代は、移動生活が営まれた前半の旧石器時代と、定住生活が始まった縄文時代とに分かれます。そうした中で、極めて少数例ですが、竪穴式の床や炉それに柱穴などが残り、縄文時代の住居と似たかたちの住まいが旧石器時代にも造られていました。それが、住居状遺構です。この住居状遺構を「固定式住まい」とみなすと、北海道は中本遺跡から九州は水迫遺跡まで、日本列島の各地で発見例が報告されています。ただし、それらが確かな人工物かどうかの検証も必要です。

<質問>何故手間のかかる槍先形尖頭器を作るようになったのでしょうか。ナイフ形石器と比べて槍先形尖頭器は狩猟具としてどれほど優れているのでしょうか。

<回答>槍先形尖頭器は、それ以前に作り使われていたナイフ形石器と同じで、柄の先に取り付ける、ヤリの穂先だったと考えられています。ただし、石器の製作実験によると、槍先形尖頭器を作る手間ひまは、ナイフ形石器作りと比べて、数百倍に達します。また、原料の消費量も数十倍にのぼるものと見積もられています。その反面、槍先形尖頭器を穂先としたヤリは、ナイフ形石器と比較して、段違いの命中率と威力がえられるという実験の結果があります。

槍先形尖頭器が使われだすのは、旧石器時代の中頃のことです。この時期、地球は最終氷期の最寒冷期に当たっていて、大形動物は絶滅に向かっていました。大形動物は旧石器時代人の重要な食糧源であり、これが失われるとなると、狩猟の対象はより敏捷な動きをする中小の動物に移らざるをえません。それに対応して、狩猟具もより効率よく確実に獲物を仕留める必要にせまられて、槍先形尖頭器が採用されるようになったと考えられます。

<質問>田名向原遺跡の住居状遺構について、そこに住んだ人々を石器製作の専従者集団

ではないかと説明されていました。ではなぜ彼らは石器石材に乏しい関東にあえて住んだのでしょうか。石器製作の専従者ならば長野県や東北地方など石材環境がより豊富な所に住むのが普通ではないでしょうか。実際田名向原では黒耀石が使用石材のメインのようなのですが。

<回答>狩猟採集民であった旧石器時代人は、石器の使い手であるとともに、石器の作り手でした。石器の使い手としては獲物に恵まれた狩場に、作り手としては優れた原料が手に入る石材原産地に、それぞれながく留まることが理想的です。狩場と石材原産地が同じ場所に重なり合っていれば、理想的で問題はありません。しかし、関東・中部地方の場合、関東平野は日本列島最大級の狩場であり、そこから離れた中部高地が黒耀石の大原産地地帯でした。そこで、狩場での狩りと石器石材原産地での石器作りの分担が始まったものと考えられます。ここに、石器製作集団と、同集団が狩場・石材原産地間を繰り返し移動し再利用する住まいとして造った、住居状遺構とが出現をみたものと想定されてくるのです。

第2講 縄文時代の住まい―敷石住居の謎に迫る― 山本暉久先生(昭和女子大学大学院教授)

<質問>千葉市の大膳野南遺跡では貝の粉で床を敷いた柄鏡形住居が見つかりましたが、石の代わりと考えて良いのでしょうか。

<回答>大膳野南遺跡の柄鏡形住居址は私も調査中に見学しました。その時にも調査担当者に考えを述べましたが、東京湾東岸域は敷石材を入手することが困難なため、貝粉で床を敷き詰めて、敷石と同様な効果を得たのではないのでしょうか。しかし、まだ類例が少なく断定はできません。ともかく大変興味深い 検出例といえます。詳細な調査な調査報告書の刊行が期待されます。

<質問>敷石のある住居に居住したのでしょうか。(居住できたのでしょうか)暮らしにくかったのではありませんか。

<回答>わたしは、居住した一般的な住居と判断しています。その理由は、講座で話したとおりで、配布資料をご覧ください。暮らしにくいと考えがちですが、石を平滑に敷き詰めることにより、土間のような硬い床面効果があったのと、次の質問とも関連しますが、石に 炉の熱が伝わり、保温効果もあったのではないのでしょうか。

<質問>敷石の一つ一つに何か意味合いはありますか。炉の石や祭壇以外の石に何か意味が見出せますか。

<回答>敷石も生活時点、構築時点から敷き詰めたものと、住居を廃絶するにあたって儀礼的な行為の結果敷石したものもありますので、すべてを同一視することはできません。しかし、敷石をするという行為が縄文時代中期末から後期中葉の南西関東から中部山地に流行した意味はまだまだ、未解明の点が多いことも事実です。

<質問>縄文時代の住居の種類は岩陰・洞穴、竪穴式、平地式、壁立ちでよろしいでしょうか。そのうち、竪穴式、平地式、壁立ちの出現時期と消滅時期についてご教示ください。

<回答>縄文時代の住居構造の中に柄鏡形(敷石)住居址も加えてください。平地式かどうかはなかなか調査では判断が難しいのですが、いわゆる掘立柱建物址も平地式、あるいは壁立ちの建築構造に含まれます。ただ、住居か否かは論議が分かれるところでは。

竪穴構造は旧石器時代にさかのぼりますが、縄文早期前半ころには、一般的な構造として、縄文時代全期間にわたって造られた住居構造です。平地、壁立ちの住居構造も前期には出現しています。ともに、縄文時代以降にも造られ続けます。

<質問>縄文時代の住居は竪穴式が終始主流であったと理解してよろしいでしょうか。

<回答>そのとおりであると思いますが、縄文時代中期末葉から後期中葉には、南西関東から中部地方にかけて、竪穴構造を基本とする柄鏡形(敷石)住居にとって変わることが注目されます。その点は講座でお話したとおりです。

第4講 黒井峯遺跡から見た古墳時代の住居構造 齋藤聡先生(伊勢崎市立第二中学校)

<質問1>黒井峯遺跡の水場はどこですか。河川ですか、湖沼ですか。井戸の跡は出土していますか。

<回答>黒井峯遺跡付近には湧水点が多く、そこから湧出する豊富な地下水を生活に利用していたようです。集落付近の湧水点には、板で水を堰き止めた「水溜」と板敷きの「洗い場」とから成る「水場」があり、人々が積極的に湧水を利用していたことがわかります。このように豊富な湧水を利用できる環境であったことから、井戸を掘削する必要はなかったのでしょうか。これまでの調査で井戸は検出されていません。

また、これらの湧水点から流れる小河川沿いには小規模な水田も作られており、湧水は生活用水としてだけでなく農業用水としても利用されていたことがわかります。

<質問2> 竪穴住居の中に何か敷いていたような様子(例えば寝具の様なもの)は見られなかったのでしょうか。(平地式では土座の様なものが見られたようですが…)

<回答> もともと竪穴住居は平地式建物に比べ棟数が少なく、また、保存の必要から「土葺き屋根」を除去せずに埋め戻したものもあり調査事例が少ないのですが、これまで敷物を敷いていたような痕跡は確認されていません。

<質問3> 竪穴住居と平地建物が一つの家にある理由は何でしょうか。

<回答> これまで以下の2つの可能性が指摘されています。

まず、「身分の差により住む家の形態が違ったのではないか」という説です。立派な積石塚に埋葬された人々とそうでない人々がいたように、「身分差」は存在したであろうと考えられます。また、多くの建物群で竪穴住居が垣の外側に位置しているのも事実です。しかし、「身分の低い者が竪穴住居に住んでいた」ことを証明するような資料は、これまで確認されていません。

次に「季節により住み替えが行われたのではないか」という説です。つまり竪穴住居は冬の家屋、平地式建物は夏の家屋というわけです。これは北方の民俗事例をもとに唱えられた説ですが、黒井峯遺跡などの調査からも「平地式建物には生活の痕跡が色濃く残る反面、竪穴住居にはその痕跡がほとんどない」という事実が確認されています。噴火の時期は田植え前の初夏ですから、調査から得られた結果はこの説と整合するわけです。<質問2>の竪穴住居内に敷物がない理由もこれで説明することができますし、個人的にはこの「季節による住み替え」を支持したいところです。

第5講 出土部材から見た古代の住まい

宮本長二郎(別府大学客員教授)

<質問> 竪穴住居について、復元の場合、床面下のボーリングなどして地層・地下水のレベルを調べたケースがあったら教えてください。(余程深い水脈の通っているところでないと地中は浸透圧によって水が吸い上げられてしまうのでは)

<回答> 竪穴住居の床面下の地層は平面実測後にトレンチを入れて断面調査を行うのが通例ですが、地下水のレベルまで調べた例はないと思います。縄文時代以来、住居に適した土地選びは心得ていたように思います。

<質問> 登呂遺跡の住居周りの溝程度では、水田地帯の住居は「冬用」では。多雨の時期には住居の床が土盛されていなかったとすれば、地面下ではないので痕跡は残らなかったのでしょうか。

<回答> 登呂遺跡に限らず、発掘調査で検出された竪穴住居の周囲の地表面は後世の耕作等のため削平されるため、住居周縁の土盛りの残存例は少ないけれども、山間部の調査例などにはあります。

<質問> 鹿児島県の上野原遺跡の竪穴住居の復元に関して上部構造をどのように想定した理由を教えてください。

<回答> 竪穴住居の復原形式は地上面に屋根を伏せた形式と、地上まで側壁を立ち上げた例が考えられ、前者の方が多かったようです。側壁をもつ竪穴住居は竪穴壁面に添えて側板や板壁や草壁を立ち上げるための板や柱等の材や痕跡が残存している例があります。

第 49 回明治大学博物館公開講座「考古学ゼミナール」

『考古学から探る古代の住まい』

質問回答集

2012 年 5 月 25 日 明治大学博物館

複製・転載はご遠慮ください